

貞丈雜記

鳥目 鷹
物數 言語

十八

			二〇七八一	和書門
一六八	一六八	一六八	一六八	
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
一五三	二〇七八一	一六八	一六八	和書
函	架	冊	號	類

庫 文 閣 內	
番 號	和 20781
冊 數	16 (15)
函 號	153 278



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





雜記牙十五

- 一 名目表の記
- 一 序の部
- 一 物教の記
- 一 言語の記

花廼家文庫

淺草文庫

雜記牙十五

伴誓平忠貞文

各目執之部 金根執之部 並入

一 祿の事を各目とも務目とも務眼とも云々のハ祿の祿務と云
 各の目申似たる有之眼ハ事あること云字まで目ト目ト又其初ト云
 事ハ祿ハ初トして作る之ト云ハ其ハ昔くある有之
 一 祿を科是とも要脚とも云々の初ト有之ト云々のあり
 科ハ物の代物のハ之有ハ其あると云々ト云ハ物あるてハ其ある
 是も御もありと云々ト云ハ其ハ世をめぐりありと云々ト云
 是何らわハ一修て科是要脚ありと云々ト云

又説一
 各目者其文を百文といひ百文を十文と云事ハ種倉の事
 の付代ハ條相摸入道之時我修ト云根之有之を云々ト云

方時カヲ
カミ合セテ
ホレトモ
丁本平記
三ノ多ク

中、大を多く集め、合せて、中、みと、後、近、西、
中、付、て、大、を、求、る、日、の、事、な、れ、後、ハ、近、西、ハ、大、も、多、く
な、り、し、よ、り、て、大、の、代、り、ハ、換、を、出、さ、せ、て、を、求、り、大、を
引、よ、せ、る、と、云、う、の、大、の、代、り、ハ、出、さ、せ、た、る、換、大、一、正、の、代、十、文
づ、出、十、正、の、代、百、文、百、正、の、代、五、文、之、換、を、何、正、と、い、
事、是、より、換、り、る、と、我、

一、古、物、の、代、物、も、と、進、物、も、名、同、ハ、り、用、ひ、之、大、判、少、判、
亦、之、云、物、古、ハ、あ、り、し、な、く、根、も、今、の、丁、銀、ハ、あ、り、り、
金、ハ、砂、金、と、し、金、山、より、金、を、石、色、出、し、白、き、石、よ、り、付、て
あ、る、を、石、を、折、碎、き、水、中、に、入、れ、り、砂、を、ゆ、り、す、て、金、斗、り
を、ゆ、り、を、ゆ、り、吹、し、て、ゆ、り、て、を、あ、の、や、く、あ、る、を、換、り、
之、進、物、り、り、と、云、り、
旧、記、ハ、砂、金、何、も、と、云、ハ、秤、の、量、目

也、大、館、書、札、秘、傳、抄、金、子、六、十、五、ト、ア、リ、書、札、等、ハ、金、五、
十、五、限、百、五、ト、五、子、ト、付、事、ハ、何、ハ、但、ラ、苦、煩、之、道、照、五、五、
云、禁、裏、様、ハ、進、物、之、事、一、カ、の、時、ハ、御、初、一、徳、砂、金、十、五、
昔、由、目、録、ハ、調、進、分、備、之、南、時、砂、金、ま、れ、あ、る、乃、黄、金、を、
納、之、由、目、録、ハ、黄、金、と、不、致、調、進、之、是、ホ、の、旧、記、ハ、黄、金、
又、金、子、あ、り、あ、る、今、の、大、判、少、判、の、事、ハ、あ、ら、ハ、板、金、半、金、
亦、と、を、切、て、進、物、之、事、を、云、何、事、と、云、ハ、秤、の、目、之、板、金、と、云、ハ、
金、を、吹、た、て、金、の、や、く、丸、く、し、て、板、の、形、ハ、う、す、く、打、の、も、
し、る、と、云、也、堪、川、記、云、板、金、ハ、一、の、事、ハ、板、十、枚、百、枚、之、ハ、
折、又、ハ、唐、の、盆、と、云、は、こ、ハ、テ、板、露、ハ、又、只、二、枚、も、同、亦、ハ、
亦、亦、と、云、て、包、を、あ、け、ハ、半、と、云、ハ、あ、く、ハ、但、時、ハ、
お、知、る、事、一、の、事、ハ、半、金、ト、云、ハ、竹、あ、り、一、の、云、金、と、云、

大判小判
小粒ハ度
七元年
ヨリ嫁ル
是レハ度也
金ハ油増シテ天
下の財宝と知
ラシメぬ換ハ
めシテあり

銀もても大めてさうして細き竹の筒一流一込年のやくし
たるを入用紙つゞよ切て老の進物をとるも老るる古ハ砂金
も黄金も常の進物よい新一まれの事之常ハ各目ハ
り通利して進物と稱ハリ之千疋百疋と折紙よ去
て紙をハ列よ折紙ハ書ハるる老と老ハる之今時のいし
折紙ハ小粒紙をとり付る事ハありし之金銀通利を
天正年中乃比り出来一武田信玄甲州めて通利を
られ一甲州利と云金ありさうさう一五六分斗り
たくりすく老る物あり今もたれく持信ハる者あり
東照宮の代度長年中より佐後の金山を初め諸山
金山出兼て金銀せよ多くあり大判小判小粒の移り年
々

右ハ金銀少きより右金銀を物の代物とて老をさし通用す
事名なく老る各目斗り通用ハる之

四十六代孝謙天皇内代天平勝宝七年奥良ヨリ嫁テ金ヲ進上ス

一 一ハ金ハ陸奥國少田と云ふより出さう万葉集ハカ
銀ハ四代 天武天皇 白鳳三年 三月對馬 國ヨリ嫁 テ銀を 進上ス
のあり大君の代代さうえんとあつまるるものく山もこの花
さくともありこの花さくともある今も奥州ハある金花
山の事あり庭訓性来り奥列金とありハ金銀ハ大
刀さくも花を介乃さうりも用ひて物の代物ハ通利申さる
事名ありし之

一 一段後と云事日記よあり 後の字スミテヨムヘシ ニヨリテハヨニス 尺素性来り就
弱之小名田比惣之分莫天之段後夫役事難原之次牙也ト
天役トハ 昔ノ詞ナリ 其ノ意ハ 用ハる事ナリト云
あり義教公内元彼記ハ即位段後事とあり段ハ

東遊卷之
三十四御祿
大嘗會用
進奉無用
地一段可
進所錢
二言文之由
宣下之元
云々
冬瑞日
永享
九年元
月大
嘗後元
定從以
免除之
一段所
之族者
覺可
在
其
課
科
之
由
不
比
作
下
也
仍
執
達
以
件

寛正六八三

伊勢守殿

貞親

教位之種
下中者貞基

右一段別拾足トハ田を及付各月百文ヲ役祿を乞ふ之
一室所及の日記曰貞文云云此室所日記ハ義晴公事リ義輝公時代ナリ
義晴公後日記リ義長公ニテ日記ニタル書之平カクノ書云

一申方元の木綿十五疋買取由役毎疋三之上也
五疋後取以之川ま本めんハ今知と一疋付を乞ふ下七疋
の七買取めてハ是も一疋まよおとらぬ本綿よめてハ是乞三
か定よめてハ方を乞ふ得て乞ふ
一沙為元も一之元切采核沙石よりをらひ可也
ら作越以共座の賣買を石付五分三小あいの
也まのたや新たはつしんを乞ふ得可也

十二日云

林基五郎

岩村たまた
佐地権助
飯尾あはる

右ハ天文九年の事ニ是より凡百年経ハたのこを價高下
芝ノさりし由寛永の代ノ事ハ本錦一疋百文又くらゐる米
もそれ由陸ハらく成元禄の代米一石の代銀百目本錦
一疋代々賣ル者百文と成今亦七の程年百の米價もそれよ
り少宛の事下あり由氏ヨウウの時代即ちつりつり
来れる事右或ちよアノ事はし

一 祿百文古ハ丁百也近代九千六のを百文とす之寛永年
中寛永通寶を鑄られし以より始る也 丁百ハ丁百也
細ヨ合テ時々
知れざる百石を永松賣文と古く定めし之は永といハ
永樂祿之の祿也 永樂祿ハ大明の二代めの天子太宗
皇帝の代永樂九年鑄られし之也

百代

後少和院代徳永十六年由あるは義持公の代也
右の永樂祿日布く後り来りて多々通用一後ハ日
本めて永樂祿を鑄て通用一ル之秀吉の代也 百代
ても永樂祿を鑄ししと寛永通寶の祿ハ明正院
代寛永十三年始て鑄られし也 近世の昔上院中院下院と
て三院ありしと上院と
云ハ上院より傳る祿中院とい大明より後りしは下院トハはるるを鑄と
祿ノ事と云はれしとあり
一 かんじと云ハ根の吳名之南鑿と書之とくれて性
名き銀の今ノ下銀ニ非ス源平盛衰記ハ中宮出虎の條砂金千両南
鑿百両銀七振トあり又同書十吉の卷 三位入道宗盛の秘
傳 秘
箱の白馬の名を南鑿と名付られハあまりの白き
なると云ふなり 白く光りて似て銀に似しと云
南鑿と名付しと云 職人亦合の傳
白子細工乃詞よかんじと云のやうなるなり

前三七
百足十疋
平足六
又今之
五三三

あり又備打の詞はあんにやうめてらちりてくらりて
ありらちりてくらりてあんにやうの性の子を報よてくらりて
一 換を費文を百疋と云は百文を指疋と云ふの奇矣雜續
云 此書ハ富所及の時代は信位未及の科足十疋廿疋といふ
いそれハ犬追物の時河系者犬ををあつて百疋をあてハ
を費文とりあ疋もあてハ百文と云ふ犬疋ハ指換
よあはるゆへに十換を疋といひ百疋を十疋といひり
是犬追物より出ることハあり云々

一 南庭又南庭と云物東鑑乃中不らあんにやう一殺ハ三
十疋ナラあり扱は南ハ南鑿乃畧語あるへし南
鑿ハ銀の事ニ延の字又庭の字皆略字ニテ本字ハ換
あるへし扱ハ治えとよむ字ニ根を扱の如く打の如

在ハ砂金ヲ云
造和ニシテ
御金ハハニ
フキタテ六
砂ノ如クナル
云

一 一疋半銀を南扱と云はし東鑑卷五ニ唐綿十場唐
綾絹羅等百十場南庭三十唐墨十同卷廿九ニ以卷侷十
疋南庭一被充布施物云々 同卷三十三同レ文アリ其文ハ卷侷十疋
○墨又臘燭ナトノ類ラ一扱ニ扱トイふもそくしちるをそくして扱の如くあるゆ
一扱ニ扱ト云ふハ南庭の延もそくして扱ノ字あるし扱ハ杖あり古ハ金銀
を扱と同一く通すありハ金をも根をも扱の如くナラて扱ノと云
又ハ筆のこくして筆ノと云是を進物ありハ筆ノと云ハ筆ノと云ハ筆ノと云
○を切て或はそく通具のそくして或は筆ノと云ハ筆ノと云ハ筆ノと云ハ筆ノと云
あるハ秤目あり今の小判半枚のめきりハあり

四修院延應
二年七月十六日
改元
仁治元年ト
ナル

一 名目或疋と云ふの記不ら或ハ疋時入道大を集めし
より記らとも云或ハ犬追物より始る云扱は東鑑卷の
三十三延應二年庚子九月廿日寅の記文ニ云此家人ホノ中
任友之輩不勤行役事依有其恐召進用途之由今日有
評定所謂左右衛門尉分人別 左右兵衛尉分人別 左右近
將監分人別 内舍人分人別 等也 不供奉行幸等者為毎年
三十四 廿五

役可進濟云々 以文の諱舎將軍ノ所家人 禁裏ヨリ友位ヲ申受テカラ録
倉ニ住居シテ禁裏ノ御用ニ役ヲ勤メサルハ恥シアルニ依テ其代
用進ヲ禁裏ノ献トスヘキ旨定メラレタリ其官ニ依テ用途ノ多少本文ノ
如シ用途ハ役勤ヲツトメサル代リニ鳥目ヲ出ス役録ナリ
 右ハ金子少判少程ホハ等々用途と云ハ用脚と云ニ同シ鳥
 目乃事之ハ時既ヨ百匹三匹ホの物アリ延應の年号
 ハ當時入彦の代よりハ七十年程以前あり是を以テ
 考レハ昔同家定と云フハ當時の犬の事ナリ起シヨ
 ハあらま史より以前より云始めヨリ奇異雜談
 乃脱犬進物より始と云を云と云ナシ 以後亦ナシ
 一 知行何費と云事ハ何とハ何費文といひ之を以テ
 永松書文を云と云といひ之を以テ考合を云

鷹類之部

一 鷹を捕ふる事ハ武家の友家ハあつた公家より出シ
 あり武家ハ鷹の事知レシと云レれども鷹ハあつた
 中記より云々書札類ニハ鷹ハ武家の道ハ鷹
 同トシテ武士ハ人々より不若者者まあると云鷹
 を鷹ハ鷹と云鷹ハ鷹 鷹ハ鷹 鷹ハ鷹
 又鷹ハ鷹と云鷹ハ鷹 鷹ハ鷹 鷹ハ鷹
 の物也但南時ヲ案同ト云事未詳の事あり
 禁裏の鷹鷹をハ古ハ持明院及のあつたりヤされ
 今も公家ハ持明院及と云家あり定テ鷹の故実を
 考合ヨリけ傳ハられ

一 此處て鷹ハ男名小ク一て女鳥ハ大ある也鷹のふくめ
た
一 兎鷹ハ男之^{オホメカ}才鷹ハ兎鷹の女之男名ハ少年友小ト云
女名ハ大ある友お向うたたいとも云
一 白鷹ハ日本より朝解^{アサトキ}玉より返る^{ヘル}鶺鴒^{セキキ}を取
兎鷹ハさいきりの男之鷓^{シメ}ハ鳥の女の女之あましりたり
とあるいさいきりの年あり
一 雀^{エツサキ}絨^ニはどの男之雀^{ツグミ}ハ鳥の女の女之大サひ急名^{イサナ}なり
あり急^{イサナ}さいハ力弱^{チカラヨク}一者^{ヒト}とらんははハ小名^{コナ}を云又^{また}だい
さいさいをとり
一 さしさいハ小集^{コウシュウ}之大サをも秘^ヒあり諸^{モロ}鷹^{トウ}の餌^エうりをす
ありわ名^ナをもえむうはらをもあふ

一 かつさいも小集之
一 兎^ウ集^{シユ}ハははよ同一大サあり名とらん
一 兎^ウ鷹^{トウ}ハ下^{シモ}を小鷹^{コトウ}とのめ
一 若^{ワカ}鷹^{トウ}ハ種^{タネ}めてそのさしを云^{イハス}黄^キ鷹^{トウ}とも新^{アラ}鷹^{トウ}とも云
一 斤^{カネ}之^ノりとハ二年^{ニニ}絶^ツるを云^{イハス}松^{マツ}鷹^{トウ}とも云
一 諸^{モロ}之^ノりとハ三年^{サン}絶^ツるを云^{イハス}替^カ鷹^{トウ}とも云あり
一 諸^{モロ}斤^{カネ}之^ノりとハ四年^{ヨン}絶^ツるを云
一 名^ナ鷹^{トウ}と云ハ四年^{ヨン}の秋^{アキ}より十年^{ジュウ}代^{ダイ}年^{ネン}も名^ナ鷹^{トウ}と云
一 細^{ホソ}名^ナとハ今年^{コノトシ}生^ナれしを七月^{シチグヒ}より冬^{フユ}の月^{ツキ}まで近^{チカ}
取りし若^{ワカ}鷹^{トウ}のめしさいさい名^ナ鷹^{トウ}せぬゆえなり
一 下^{シモ}名^ナ鷹^{トウ}ハ今年^{コノトシ}あり二^ニとやハ二年^{ニニ}之^ノ
一 築^キまりりと云ハ今年^{コノトシ}生^ナれしを七月^{シチグヒ}までまてし

- 一 取たるを云七日来あつたあけと云
- 一 山よりと云ハ山あてと云と云と云も忘るるを云
- 一 野されとハ三月より四月はあつた若鷹を云少と云^{トヤ}忘るるハ仲人使きてつと云ひりきいと云
- 一 巢鷹とハ巢の内よりあつてひふの時^{ひふとき}より
- 一 少山之りといあけの鷹四月廿五日より四月廿五日打落し
- 一 さらぬ之りといあけの鷹四月廿五日後打落しと云
- 一 冬^{トヤ}とハ夏の末より羽ぬけ後冬まで新羽生とのみと云
- 一 角鷹ト書てくぬくと云む之矢の羽ハ鷹の羽と云ハ

- 一 くまたくの羽のりてくる鷹の羽ハ矢の羽ハ不用
- 一 鷹の歌ハ鳩ちと云馬の歌ハむちと云トツカは後あり
- 一 あやまりて馬具の歌ハ記をえ念ふし鷹の歌ハ各ハたうあがりト云あり
- 一 鷹飼の羽ハ山の物ト云ハ雉子山なるうさきあとの事あり
- 一 田の物と云ハ雁鴨鶺鴒あとの類を云
- 一 お手、繩と云ハ鷹をとりける繩ハ水繩と云ハ水をあひせる繩あり^{あつたをとりける}魚をと云ハ鷹をとり繩ハ大緒ハ鷹をつとぐ繩あり
- 一 鷹^鷹狩の時鷹の取るる名を木の枝よ付たりあり^鷹枝ハ何の本あてもあつた名採ト云あり梅梅るとの枝ハ花^鷹ひりきと云めハつけばはるしと云枝又ハ花ちりてと云枝

鷹馬

巾付る之その子細ハ鷹ヲ遊れてる立さつきて花ちり
らるるありしは初といたやさく知らぬおそれいはれ
たると教ふる枝よ付るあり 是鷹飼の家の家
と我^つ仲勢物終小梅の佳くり枝よ下^下を付るあり
あり末末抄は紅梅此枝よ下^下を付るあり
是ホハ時のたりおれよ志するのやれいお家よららぬ
一 唐五少てハ鷹を右のよよすゆるえ南宋書よ右臂鷹
左牽物とあり又左ありも一鷹の身あり ^千 ^前
りらるるしりらるる一人ハ右れをえたり

一 公家よても鷹をたれをえたりとて武家よ習るあり
江家次第云左半居鷹右執付雞枝とて或は公家
よいたよ鷹をええらるるト云ハあやまりと

一 鷹の取たる名を記しり後よても縄めてもくるをハ
山緒うくるト云あり山^山の物と田^田の物とつけ換るるあり
山のお田の物
のよは田の物うけれいとて田緒といはぬと山緒と云い
そいそれハ鷹ハ山の物をえする事ト本武とされ
鷹の鳥といハ雛子の事ありされ田の物あり共
山緒うくるト云あり本飯あり田緒と云るハあや名自
あり 中右の書ト田緒トモ云々名しハ本武の物ニアラス

一 鷹の家五流あり政頼流諏訪流之政頼流の元祖
ハ唐橋大納言政頼也諏訪流の元祖ハ祢津神平あり
立ハ天子の鷹をハ持明院及あつらひとあり
今も鷹の取実とれ家よ傳へらるるあり

一 鷹の名と云ハ雉子の事んそ外ハ鷹のうづろ鷹の
ひそり鷹の毛鷲あしくそ鷹の名を云ん 上吉日ハ鷹の
雉をそそせしん
ひそりあり

一 鷹の名れらくちト云ハ鷹を鷹の取たる時そ名れ
むひを小刀めてそきてそ毛を取出して鷹の飼よ
飼ふそそ少方めてそきたる口をくくちと云んよ
そそよもくくちを人の方へ向けて出さくくち
貴殿えくくちをハそ鷹のろろ毛をそそそれよ
絶てそあり

一 名のろろ毛と云ハ名の口そ下の羽也
一 たうたぬそト云ハ鷹道の筑子の事んたぬそハ貴
あり鷹馬ウマ鞆ウツとくそたうたぬそトよむ之鞆ハこて

大書ニ
モルカ

と云字ハ鷹之使書ニ云鷹たぬそハ名ハ分但名よ
名ハ鷹と云ハそハ鷹の結結の結結よりそそ取名の
くいと云結ハありそそそと云ハ鷹の結ニそあり
名のくいと云ハそありそそ一方ハ危取そそ名のくいと云
あり結ハ結ハ鷹道の知るそそ結取ハ結取包結記よ
記ハそそそ結取ハそそ結取ハ

一 鷹ハ一羽二羽とハそそ一連二連と云鷹の大ハ一丈二丈とハ
いとそ一牙二牙と云ん ヒトキバ
フタキバ

一 禁野と云ハ河内國交野ヲ禁野と云不あり天子市野の地之
よのつこの殺生を禁制せらるる禁野と云ん古惟る親

五六不ぬ精一ぬひて金色の三足の雛子をぬぬあまより
しと禁地と事^{ある}今そ此里をよめて禁地と云々

一 軍陣より^{かた}架を結事尚流鷹秘決^{政教流}云款の方

一向して結指より裏子冠木を結繩を一重うけて結へ
架衣も款此方一向して結くまじ鷹をいこまうと向して繫

結ひ常但條乃結を逆扱もててこまいの取扱より繫
細條を架衣此うとてて金又鷹のあ方の取扱

時ハ如例式結し

一 葵送の意より架を結事同書云本木もうち木の方も

本木の方へ取ひけて結之是をあら此架と云こそ印左
軍陣の架乃結扱より同く繫扱ハ結扱より向より向く

金一 本木西方ぬへ一^大大の右^{かた}結し

一 軍陣の意より此事同書云山楮ノ春秋も刀を返さへうん

一刀ぬり切す印ハ此事

一 軍陣の意より鶴雲雀扱扱の事同書云か常但上下共よ舟の

切口を刀不返一刀ぬり切し

一 奉神鷹のりの同書云奉神鷹より志をちりめて珍^{ちむ}付^け

あり志のり長サ角鷹ハ一寸八分は三寸五分は切らぬ

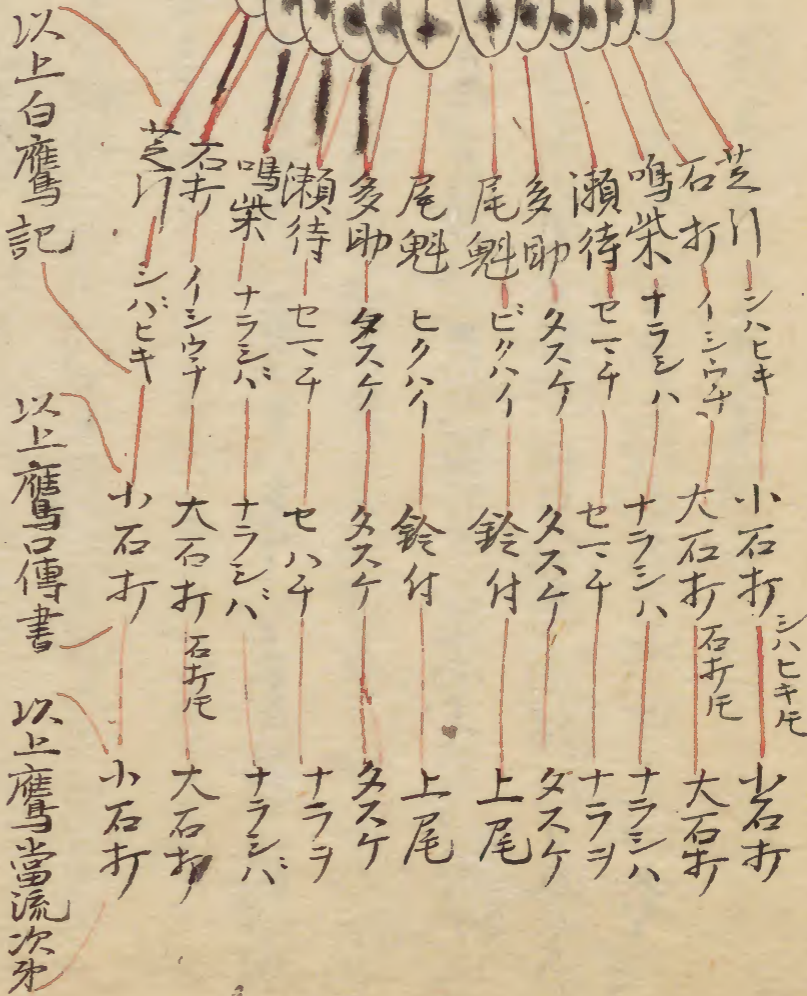
扱上ニツ中ニツ末ニツケ扱より少ツるをいへ上セツ^{ちむ}を扱

扱より志を添て初志をよ付しし見鷹より付たる志をハ

長二寸八分三ツ中より切てちりぬえ上ニツ中ニツ末ニツ

三不ちぬへし珍より切てさす

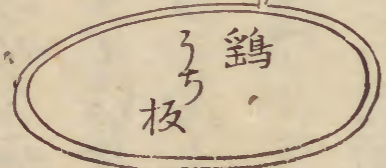
鷹尾之名



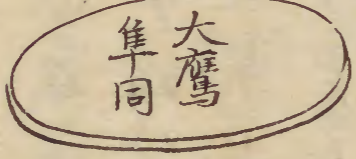
- 一 白鷹記 ○ 永和三年卯月六日前関白良基公記
- 一 鷹口傳書 ○ 嘉暦三年二月廿三日書字平
- 一 鷹當流次第 ○ 年代未詳古書

一 鷹のお板の事、は板の名をうち板と云い、鷹のふんをうちと唱るゆへ、ふんをうち板ありありうち板と云い、形丸くて薄きなりあり、尾ぬり也

お板之図



- 一 縁字サカ
- 一 長サ大ニ寸下
- 一 横を大ニ寸五分
- 但、この内のみ



- 一 縁字サカ
- 一 長サ大ニ寸五分
- 一 横を大ニ寸五分
- 但、この内のみ

一 鷹を後取後、す時鷹形より、鷹のふんをすり、ありす時、ハ板まですく、ふんをすり、板をすり、時ハ

扇をひくも鷹をたらしもあつし徳取後あてもなく鷹久
くはあま存スベてある時ハ右の様覚悟ある

一 鷹のせき緒の事橋政殿鷹三百首歌の治よせき緒中
ハ鷹をほく緒之み云鷹のせき緒を巻てさえて鷹を
仕ふりし緒ハ大緒のりハ大緒ハ鷹のあしををひ
けり緒ハハ一あ存るも架ホコまはあくるも大緒ヲ用
あり大緒の一名をき緒トハあり

一 別是のりナ良本鷹ノ書ニ大風ト一維子の是ハリを別是ト云病是一大事ノ病ノ物ノ身カタハリテ足ラカメベツクノ根カタニリケリニ近來訪山公鷹首
首云ナけりハ昔ハ禁野の維子ハ重羽ハとして是と
ニハありとナ合ハては鷹をとりこハルハ彼ハ名をとりセルとあるそれ
そ待ハけをたハくハハハ彼ハ名をとりセルとあるそれ

より待ハけハ始りて荒鷹のわいりハをとりあハ待り
けハ合ハれハハあハくハ用ハ之ハ維子の是を別是と云あ
りするハ禁野の維子より起れり尚時ああるは是ハハ
あれとも維子の是ハ限り合ハて別是と云とらんハり
禁野ハハ河内ハ交ハ野ハ禁野ハと云ハあり天子の御符ハ
ハ少代ハ之ハはハいハれハて維子の是をハ別是と名はけり
鷹ハハ千ハ事ハ吉ハ事ハあり

一 鷹のみよりきハと云ハと云ハみよりハ鷹の存ハたハハ
ハ鷹のたハみよりハ鷹をたハのハまハをハてハ其身ハのハあハり
ハ鷹のたハみよりハ鷹をたハのハまハをハてハ其身ハのハあハり
ハ鷹のたハみよりハ鷹をたハのハまハをハてハ其身ハのハあハり
ハ鷹のたハみよりハ鷹をたハのハまハをハてハ其身ハのハあハり

ヲたともてともよむ之又のと云音ハなもたも通する也
●^メふあふふもたふ^{サキ}先もつら

一 舊の餉^誼袋寸法ハ多し物ある一法少納云物草紙

よ云おのりくゆてよき物法作く物家餉袋すなり
のすことあり 餉袋と云ふこと云餉袋といふことして物又草
あるもて通する物あるは牛を組する籠之形つもの如し

一 女^メの女るといふハ春の雛子の女ると云 たもここののきり付
トヨメリ 飲食ノ記

一 名を案よ付るの源氏物語中草をよ花人のたつめの厨を
内使ありきと一枝としてまうくせありき河海抄に

云付る枝の事案言七尺八寸普通の物あり
葉せそく急くして表裏も色あひしうり是を名
付案といふ一流よ云いんちむといふ物之年月

左立枝を履くそ^メ雄をたりよあげてつけ^メ雌をさげ
て付く春ハ^メ雌をよつてつく春ハ^メ雌を考^メ整するゆ
あり 付移口傳有る

物教之部

一 統儀也七五三の教を用多事一三五七九を陽教といふ
二 六八千を陰教ト云陽ハ物を生シ成長セシむる気あり
陰ハ物をくめかす氣を傷ミ統儀也ハ陽教を用多事ハ
教の内也也初の下終の九を捨て中の七五三斗り用多ハ
陽氣のさうんあるを不用多ん之物の初ハよそく終りハ
おとろふ之傷ミ初の下終の九を除去ス

一 神道ハ八の教を以て教多き儀とする事一より十迄の内
初の下終の十を捨て残る教ハ之初も亦く終りも亦く
限なきん之八百方八千代八雲杯の八の字皆限なく教多き也

倣あり

一折一合ゴウと云ハ二ツのよしと云ふなる人五條より二ツの事あり

てて箱物をハ一合二合と云へ唐櫃ありとも一合二合とのあ

二ツの事合ハ盒ガウの畧字と云へ盒ハもと云字と

一具と云ハ何れも對中標と云物と云也けむと云

をあふもる。肩衣をうぬ。あとの款ハ一具と云

一襖子をとも一えし二枝ト云へ糸と云の書あり

一鞍イック一口イックとあるをひとくちとよむハ一いつく

トよむハ一上古の書ハ太刀の事をも一口二口とあり又

鐘カネ一口イック鈴カネ一口イックありともあり何れもいつくトよむあり

一禮ハ一領と云禮巾をさす小袖をも一領ト云あり領ハ

カフトトよむ字と云りの付る物ハ皆一領と云也

一曹カフト一劔カフトと云ハ款の曹カフトをいふ類あり武雜書札篇と云

常用集 一劔カフトハ字ハ尾テ不書ク劔ハキルとの字と云へ傷る身方の曹カフトをハ一劔と云りて忘る一頂イッペンと

云へ頂ハいたくト云字と貞衛の銘と世と一頂と云の

を知ぬ人あり

一鞋カフトよりきりて一尺二尺と云ゆあらず大業及お傳の書と

一履カフト一丈とあり一尺二尺と云いれ詳あり一尺以上の

鼻の穴あるをハ一尺ト云ふ又より事ありするを

一弓ヒト由一ちと二ちとト云る弓のけだりくををあるあり

かこくにきりて一握りを一ちと云へ弓馬秘伝書札

雑々ゆめあり

ひとふくらの
すし陣使
云ひとふく
トハ一
ト云ハ二張り
ト云ハ三張り
ト云ハ四張り
ト云ハ五張り
ト云ハ六張り
ト云ハ七張り
ト云ハ八張り
ト云ハ九張り
ト云ハ十張り

一弓を「ふくら」二ふくらト云ハ一枚二枚ト云ハト小笠原康成
書ヲ云々ト用客記ゆえ「う」ひとふくらト云ハを「一」弓
射場馬場を「の」弓射をう「つ」時弓はえ一枚ト云ハを
ひとふくらト云ハ

一物の寸尺を定るゆ事事ハ陽射を用「一」凶事ハ陰射
を用「一」陽射ハ一三五七九之陰射ハ二四六八之吉事ゆハ
きとハ二丈四尺ゆと事物も是ハ陰射ある一寸又ハ
一分三分も余計をす「き」是陽射を用るん「凶」事ハ
きとハ三丈五尺ト云ハ事物も是ハ陽射ある二寸又ハ二寸

四分も余計をす「し」是陰射を用るん「陰陽」の射を量
りて用るハ吉凶を分ツ事あり「吉凶」を分ハ「統」あり

一酒一献二献一度二度と云ハ内盃の形も記ス

一弓の弦ハ一條二條と又一節二節と云一弦トハ七節を云

節用集 弦十三節 曰二節七節 曰一弦一ラハ二節七

一桶トハ廿一節之桶ト云ハ廿一節物「一」の「廿一」節入て
進上す「之」智法を上古ハ副法とも設法とも云

一う法不ラハ「ツ」ツと云ハ「一不」二不とハ不云

一養目一勝ト云ハ「四」ツの「ゆ」大進物の時乃る「ゆ」孝子ハ

云々ハ「一」束トハ廿の「ゆ」廿一以上ハ廿二ある云

其後ハ「一」束とハ「四」寸の「ゆ」一把とハ廿一の「ゆ」之「是」仁田右衛門

の「後」射方等書「ゆ」「ゆ」は「説」用ひ「ゆ」

殿中日々記云
三月廿日奉公
山田ノ一尺
奉公云山田
ト奉行方ヲ
奉公云ト云
山田ハ氏ナリ
應仁別記ニ
雜字抄ニ
録ト云矣
一尺斗十升

一 矢ニ云一を二ト云事ハ的矢よりナリた多事ノ外ノ矢
をハ一ノ二ニ云トハ云事一子ニ一ツニツト云一ニ云一ト云ト
但一子四目一子神弓ハ一子一子ナリ一子ナリハ一子ト云一
一 物ノ殺乃云物武雜書札道照書系よおとあり畧し
一 保侶衣をハ一領二領ト云保侶衣一牛領ト三代實錄ニあり
一 鯉を一尺二尺ト云ハ一隻の音をうけて云ぬト云後五
隻の字ハかしくト云字字一一隻といふハ一ツのりす
ヲ限りて一隻と云にけり何れも一ツのりすとい
一隻といふ事ナレハ後用雜一揃子ヲ前めも
記スこと大君ノ氏ノ書ハ鯉を一尺といひり鯉も鯉も
奥列より出ル魚ノウの玉の初よすゞて奥を一尺二尺

形入ノ味忽ナ
ル者取テ海一
技入ケレハ暫
有テ鯉一尺
形入りヌラ
是ヲスレハ鯉
鱒ニ限ラス
一尺ト云

といひある事一て鯉鯉を他云々も一尺二尺と云き
一 尺斗十升
と云也他云々も一尺二尺と云き
一 尺斗十升
魚一布名若奥列の酒初より出ル魚一尺二尺のり
クワンジユ ヒトニタ 卷殺ハ新種ノ札ニイナダ
一 巻殺を一尺二枝と云 木の枝はけり 又一尺二尺も書ス
一 御後をハ一合ニ合と云あり 右も条件書札
事よ一尺二尺 天永五年の
古書あり

一 名ノ取をひと相
一 舟ノ名より久
一 柳子を一尺二
一 袖一重ト云事

一 名ノ取をひと相と云事 柳の名より限る事
一 舟ノ名より久と云事 舟の名ハ一尺二尺と云事
一 柳子を一尺二尺と云事 柳子
一 袖一重ト云事 少袖の部ニ記ス

一 屣ハ風フをヒト云ハ屣ハあるヤ又一隻と云ハひととまのハ

一 履ハ一双と云ハ人唐記ハ一双と云ハ一頂と云ハ

一 履ハ一双一二履ト云ハ保元物後と云ハ

一 墨ハ又ハ端燭の類を一挺二挺と云ハ一挺の字は元と云ハ字ハ墨ハもラもクも杖の如く細長キ物也一挺二挺と云ハ何也も不そモ物を一挺一挺と云ハ皆同と云ハ二丁二丁と云ハ挺の字ハむフと云ハ器ト挺の字ハのウと云ハ丁の字ハを修り用るト

一 輿ハと云ハ二丁二丁と云ハ丁の字ハあるトと云ハ字ハもテ一人あリ

一 布幅多シの類不足と云ハ返トも書ク又一むと云ハ二むと云ハ

一 字治拾遺物論卷七布三むフ云ハこれハあの男トと云ハせヨ男界

一 布一むフと云ハせタれハ男也と云ハ不得と云ハと云ハひテ

一 日本書記孝徳天皇大化二年紀田一所布一丈四尺成尺と云ハ尺の字ハ

一 綿一屯トと云ハ屯の字ハあリと云ハ軍陣の人衣を屯ス

一 屯ハ人衣を屯と云ハ綿一屯の時ハひトと云ハ後ノ倭名

一 抄ハ唐會云ハ緜六兩為屯トハ襲也俗三屯讀飛度毛連ト

一 昼夜の時の殺を打事昼六時夜六時也子の時を才ト

一 丑の時を才ニと云ハ寅の時を才三と云ハ卯の時を才四と云ハ

一 辰の時を才五と云ハ巳の時を才六と云ハ午の時を才七と云ハ

一 未の時を才八と云ハ申の時を才九と云ハ酉の時を才十と云ハ

一 戌の時を才十一と云ハ亥の時を才十二と云ハ

一 子の時を才一と云ハ丑の時を才二と云ハ

一 寅の時を才三と云ハ卯の時を才四と云ハ

一 辰の時を才五と云ハ巳の時を才六と云ハ

一 午の時を才七と云ハ未の時を才八と云ハ

一 申の時を才九と云ハ酉の時を才十と云ハ

一 戌の時を才十一と云ハ亥の時を才十二と云ハ

一 子の時を才一と云ハ丑の時を才二と云ハ

成の時を才五より亥の時を才六とす是陰の時之時の形を
 打は一時を十の形を定て才一の時を十一をうらひして残り九
 を打之子時才二の時を十二をうらひして残り八を打之丑時才三の
 時を十三をうらひして残り七を打也寅時才四の時を十四をうらひ
 て残り六を打之卯時才五の時を十五をうらひして残り五を打之辰時
 才六の時を十六をうらひして残り四を打之巳時皆是才一才二
 乃才五の形をうらひして残り一の形をうらひとぬべし
 一 屨凡一よりひと二双のり二ひとひは第一よりひと二常流地みづし
 二よりひと二原代皆一對ひの事日本紀は一具の字を二よりひとと
 ともせしり物の具足ししをよらひととて禮をよらひとと云
 も小道具としてよらひと具ししとるなり

海人藻菰云於内裏殿トヤハ狹柄家ノ外
 不可有之園白殿所多去持政殿何事ヲ
 中サル、凡於前申之諸人無矣候也
 親王ヲ於前何殿トハ不申之

言語部

言語の至意を知らざれば古書をよめども
 心解らざるあり

三百三十九 何うし候ト云殿ハ宮殿の殿まで屋敷のりて一の屋敷をうら
 えし人狹あまのうらまひして何うし殿と云へたとくハ
 太神宮ハ懐文あるの宮の字のりて

一 何うし候の候上右ハあるなりて字能お字時代も公方御
 應永記云大音揚テヤウ天下双を双名お大内在京控大義弘入ラワレト思シ
 等持院殿候ありて云ハ中比よりありてありてこれとも平人
 若共ハ言取テ下様ノ成目ニカケヨト名ノリカケハ戦ケルハ成和候ハ義湯公ヲ云シ
 月極を付し事ハ四記トスレハ書札の四記も皆殿斗り
 且て候の沙汰ありて道照五事云何殿候の候の字の事
 西院ハあるなりて事ハ但事トよりあるもなれ候の字
 雅世ハ供奉して富士紀行を書れしそ祭場文ニ公方候富士所候ト書れしり候候ハ極の字ヲ用たり

鎌倉年中
御筆御給
出たのり
つゆと
享徳三年
去る書ナリ
東山及時代

美観のりよりハシと云ハシ
御害記ニ云南
等持院殿トハナリ
有之事勿論也
右等持院殿トハナリ

太平記卷七七
栗飯原ヲ
在之

人ヤシ
御害記ニ云南
等持院殿トハナリ
有之事勿論也
右等持院殿トハナリ

唐永記
三

私願もあり
上ナリ
と云事

と斗り云てハ
公方様ト
ハ下むきト云ハ
ハ上むきト云ハ

一 何寺何院何軒何庵何母と云寺院新庵新寺ありと皆

何殿の殿ト同云
法之系程
院殿ありあり
布式ハ殿ハあり

東鑑卷三三
云嘉祿三年
丙申二月十一日
己未時
外
日不被上
藤原氏
樂無出御
之故也

昔古
ハ歡樂ト云ハ
不系之時
入夜松
昨夜

如例
入夜松
昨夜

亦何儀但一色或部少捕及細川右馬政及はあ不之平
儀依歡樂終るゝ歡樂と書てよまこひのゝもと
ちむゝ病と云事を書て歡樂といふハ利希子といふ事
をありのここと云と同いふこころを云利希子の事ト云ハケラム

貝あひの
子つれま
又平手書
記ハハハ
とい

一 貝合せと云ハあろくぬ詞款貝あひト云へし又貝あひ
とも云へし婚入記はあひ貝あけとあり西行法師のまふ分を
あまの浦のたまけりを
貝あひせとてあひのこころとあれはあひあひと云へし
あひの浦のたまけりを
併合せよとの合せよめりゆゑ貝をあひと云をよりとす

一 貴人の食食物をおあがり御儀系ある今人の云ハ穢し
ま詞之古ハ供湯といひる今と云あろまてハ供湯と
ヤレる由あり

一 糸といふ詞を今時ハ貴人ト對してハ有難しといふ事

天子御ラ
書ハハ
宜者ト云
頼朝々宣音
ハ書ハハ
ト書レタリ
東也ハハ
身ハハ
古ノ風

古なる事ハ事ハ古ハ公方極も糸とヤレる武雜書礼篇
ニ就何ハ儀下内書漢の頂戴先以糸をなす
又去月廿八日御教書今月三日到來畧頂戴はを以
糸を存儀あるといふ云あり内書ハ御教書ハ公
方極の御書之それを頂戴して糸と云ハ難と云
詞ハ世代のあろく糸と云貴人ト對して云ハ糸と云詞
ハ糸と云けり糸と云事ハたとハ穢し者ハ貴
人ハ世目より事ハあり糸をいふ事ハ古云れて世目
あり難しとする事ハ糸と云世目よりしとて悦ん
之ハ穢し物をも得たりとすけり糸と云悦ん
悦ん之難し糸と云ト云儀

今世係多折
テ西レクモス
ルヲカシユル
ト云ハ界リテ
スルト云ンヤリ
去人ヲ敬ヒテ
ソレテモスル
也正カクノ
ヲカシユル
思フハ非ズ

一 かしこまるト云ハおそるゝの事人高位の威勢を以て
ん之畏の字ヲリ一こまる共おそるゝともよむ之畏入ル物ト
云云云古き、物よあまげん今時ひやぬはくゝりや
ト云ハ界リテ
スルト云ンヤリ
去人ヲ敬ヒテ
ソレテモスル
也正カクノ
ヲカシユル
思フハ非ズ

一 けりしハそのおと云一を今ハ泊まぬと云そのおとハ宿直と
書之今も公家方由ハそのおと作らるゝ

一 尚書日を上日と云又並日と云尚書日とハ候き初あり
古記ニ荷用トアリ宮仕一書
師のよひといひみりやうめと云ハ師宮仕の事一ありまを
その師宮仕の事とらゆゝ人あり師宮仕とハ師信を

師次の言まで持りて師宮仕の人よ後スを由ま書といふ

一 公家方由ハ酒を九こん餅をらん味噌をむ一塩を志
ろ物あどすてて食物は吳名を付てめくそ由兼余院信
の信ハ事能得事
母代の人あり 書立れ一海人藤枝と云書まらん一りそ
以物事家の女房もそれを学びて吳名をすしされ一
そ吳名ハ上之獨名之記まらん一り

一 弓射るとヤが能らるを射るとをの字添てハ不中い 的出 法記

一 今時●人の兒をあまきトし伯父ををぢきあともそり
あまぎこをぢきと云てりやこの字を署して云あり
古ハ兄君伯父君あとも云一 あまごおぢごらともそり事記ス

一 父のそりや昔の人ハおやとや人又おやとや者と云母のそり

を母にやるといひ兒のつ子を兄弟や人をとて云ふ今世
人の父の事をおやと云はあやとや人と云ふを署
てあやと云ふ

又伯仲叔季ト云フアリ伯ハ無領下リ仲ハ次男ナリ叔ハ三男ナリ季ハ四男ナリ伯父仲父叔父季父ト云モ
ハ事ナリ
父ノ三ツナ
オラ叔父
ト云ハシナ
オラ季父
ト云ハシナ
ト云ハシナ
ト云ハシナ
皆オヤニ

- 伯ハあよとよを叔ハあとトよむえされハ父の兄を伯父
父の弟ハ叔父父の事ハあハ伯母父のつとハ叔母あり
母の兄身も存ハ同一近世文盲ある人伯叔のつけを知ら
して父方のあぢおまを伯父伯母と見え母方のあぢお
まを叔父叔母と見え一人ありあやと云ふ
- 雜合期又不合期あると日記はあハるは合ハぬト云ふ
物窓と日記はあハるハ物駱之物ささぐりまト云ふ

一 仕合あまと日記はあハるはちやうと能きごとく物物を仕合する
るのめをぬをささぐ不幸のゆゑに

一 雜者やと日記はあハるはあまの多しあると云ふ
系と云ふゆゑにあまの多しあると云ふ

一 勿種と日記はあハるは物種也今時の物よたいもあト云ふ
同一んじあそれと云ふゆゑに

一 比奥ト云ふはあまハ比奥ト云ふはあまハ
るゆゑに比奥ト云ふはあまハあまハ

一 係病ト云ふハあまハ
不常と云ふ日記はあまハあまハ

之何れをすとも是れあまハあまハ

若女ヲ集
卷ニ此等ニ
そまハシ
第ニ第ニ
あハシ
比奥のつ
之等

ゆもたげをせんをきくを尋たト云之道具執りて何物も
帝武の通を被よそふる物もなきを尋たト云之今射ハ
人の食事等をたかく食ありきと尋たト云之道具執
あとも細くちひききを探常ト云ハ儀之庭訓往來よ尋た
の射ト云之を是もよあつて十人あみの射ましと尋たあり
下もゆて的よあしり矢ありハ尋常よあふと云之
一人の儀くめてものゆりト云ハ物ヤさうと尋たのこ相由より
どう進いト云て物ハどれより出れト云之は是あ人も知
れしきぬるをたれれ古よりの風俗の儀りしと尋たの
るもん付きれハ尋たもある物なるを記之今人の知らるる
も後よ知らぬ物よあるあり

一 故実ト云詞左唐玉の書か出さるる史記魯世家後ニ故実
故事之是者きくはハ故実ト云ハ古きものよきものをいふ
ト云之又文選四六註ニ云故實先王之道也云ハハ故実ト云
ハ昔の天子禹王湯王文王などの定めなれしものをいふ云ハ
あり日布ゆていふハ尋た方ゆてハむり神武天皇の定めを
此ゆてを故実ト云武ゆてハ形制ハ儀を尋た將軍を
の定めなれしものを故実と云むりの法武ゆてを故
実ト云ゆし

一 祝^{シウキヤリ}と云詞の事書札の神事記云
祝あり人を各忌と云詞世の詞もあは昔よりあり後

昔知行ラ
史行ナ時
三何費文下
云三拾元一
宛行ナ中ノ人ヲ無足ト云科定ナキト云ニヤリ

倉部年甲卯事二月廿七日丙午の奉よ尋た之人射人形よ尋た

時ハ以心合カ初之トアリ 昭應二年御物左近大実該本格別雅致奉云
無定之条親三依者加持持之古文也

一 くらまよりト云詞日記中あり花飾と云今時の御中結構と
云中同一三藏と云る物もあれども誤り云

一 合点と云る書札の類よ云々

式ノ肩林一

武正ト云る日記あり是ハ祝式を云々時のもよし又或と斗り
りや同云云或心の時或心の心版或の立文或の大的或の肩

式的ヲ四季

一 形又禊多ト云詞日記よくも有る云々ト云ハ此と云々

一 同ー禊多ト云事と云ハあふはるもあふささ云

一 まちをこふよ引くくト云詞乃矢の部よ記云

一 ふくやト云詞古ハある詞今ハふくやト云る多クふくや

小袖神七云ふくや、味略みそをきぬをきぬふくや、吸袖 解のあつ袖

ふくや、科祀七五三の儀ふくや、帯さげ帯ふくや、物包こきぬめ

若ハきぬ包ムある、云又ひくはくと云々

ゆあふささる物めらふくやト云事、を付て云々是等ハ皆今

の世の詞にむくハある 但一いぬあるは
山平あり一の詞

一 花を折と云詞ハ人の衣装あるの折を介出之のありや

をもあやうゆあふささる事、を云々人唐記ハ行列

形調子花を折て出さすくハる少ナリ又一章格故兼良云

の天素往兼巾面ハ出さ可化折花之由兼及ハリ 事機表
三十一表

三年二月廿二日云云 湯出之儀又殊被刷供奉人猪櫻各行殊

折花云々

太平記
卷三主上
筆置湯後
登条云同
十言三新帝
登壇ノリ
少クも梅堂
よりたり
入らせの中
供奉ノ諸
仁花を折
テ行概リ
つゝ云々

一あゆまじあひごあらざごあらざおのこははの字さうやまひしてゆ
ろしゆハ清系を畧ししる之あゆまは系あひの清系をど云ん
て後ゆあよごあとのいハ公公の字にハ倍之父清系母清系あひ
は系母清系あひ云詞昔よりあり

一雑事雑役雑事との雑の字をクサグサトよむ之様ト云
も并くとよむ即千雑の字のいこくしとさるを今ハ
の詞ゆこびくとも云又くびくとも云どさくさな云

一清系を好むト云ハ人の思入雑等を得るト云る之古き状の案
文ハ拙意状の書名のいハ可好者ト云文言あり是ハ向
奉者ト云をそて拙意を臣系下云んまて清系を好む
ト云之は意ト云ハ作と云るよハあらば今時ハ貴人の清

詞をハは意ト云なるハあやまりしは意ハは之倍之貴人の
詞をハ吉ハ清役ト云之上意と云も公方のいハ之作の義

節用集三田似清物也人獵麝香此田出人殺之故日本ニ我文ニテモキニ死ス田藏田ト云ク
サレハ今一人唐記ゆたくさだの石乃之ト云りありたくらぬトハたけ
唐ト三死人ト云ニ同シ言信ナルハ
者ノ事ト云

一人乃と云をいふをば事 いたしハ今ハあハト云又ハへい
作者ニ事ハケクナリ昔ヨリ詞云

後醍醐院の
はゆまの事
ヲ書スル書ニ
あるとの中お
ト云る事あり
そは紙に
おは隆のむ
すめニ事お
ト云る房の
詞ハ人のあ
いハハハ
男ハよト
女ハをト

後醍醐院の
をどく云吉ハた扱ハハハ云云之様糸の粗言ゆ大名あてが
太師冠者しよバハあトいふ之を云之是ハ东山殿の時代の氏
俗を今由倍たさる又云談一統ト云人をめすいふハ男ハ
おトいふハ女ハをトいふ之を事ト云リ又め乳母とのさ子りし云
人のいふ之事ハ上中下ハカ房ニテある物めてハあや親志主り
女ハをト云リの名家ニテハイラフノラ編唯トモ云之稱唯ハヘンジウ之其詞ハウト云ヌ女ハあト云リ

一 料理ト云 詞今ハ食物を謂フコトニヨリテ云フモノを云ルハ食物
 かりニ限ラズ何れモコトヲモテラフモノヲ料理ト云フニ料理ト云フ
 神ノ字ハモテラフコト訓ニ相ハルモト訓ニ何事モモテ
 云モテラフニ取ルモハ皆料理ト云フ食物を謂フモ食
 物を云モテラフニそのモテラフモ食物を料理ト云
 之食物ト云フコト料理ト云フハある

一 拘クジヤク惜ト云 詞古者ニありテカエテモトモモ字ニ物をカ
 ラスルモモ事ヲモテラフコトモモトモモ事

一 抑留ヨクリウト云 詞古者ニありテ物を留ムコトモモモ事ト云フ
 古書ニありテそのモテラフコトあるコトハあるコトハあるコトハ
 云フコト云フコトハあるコトハあるコトハあるコトハある

一 古書ニありテ古書ニ書カレタルモモモ事ト云フ
 と云フコトモモモ事ト云フコトモモモ事ト云フ

一 古書次ト云 事ヲモテラフコトモモモ事ト云フ
 といハレモモモ事ト云フコトモモモ事ト云フ

一 支説ト云 説撰ノ事ノ昔ノ詞あり
 一 叙用ト云 叙用ノ事ノ昔ノ詞あり

一 漢書ト云 漢書ノ事ノ昔ノ詞あり
 一 漢書ト云 漢書ノ事ノ昔ノ詞あり

一 了らふと云ハ用もあきむと事^ヲを云ハ今ハ無事^ヲをすまの
を了らふと云ハ非^ニ徒^ニ字^イ々^トとよむ

一 けりかるト云ハ詞古き書あり真^ガあるの畧^ヲ略^ス

一 真加ある又おわけありあ^ト云ハ詞のありト云ハ之のゆゑ
あ^ルハ真加ある大あると云ふ^ル也
ルとリ^カ通^スなりとキ^キ通^ス也
将^シ略^ス

一 まうと云ハ志^リそく事^ノ羅^字字^ノま^トハ^ト書^ス

一 我^ノ退^ニ我^ノ出^スと云ハ皆^ヲ不^ヲを退^ス也古き書^ハ大和^ノ
ま^りの^ル何^レの^作く^まり^のル^多く^云ハ^ハ家^ヲを^退ス
行く^ハい^ハむ^ハを^退り^ます^ハも^そを^不を^退く^也
を^りる^事也

一 古ハ物^ハは^る事^ハ人^ガひ^あや^しし^ト云^ハて^あり^きあり

保氏物類^ノ目^ノ考
中^ノ外^ノ古^キ書^ハありひ^あや^しし^ハ大^ノ危^ノ今^ハ保^氏物^類目^ノ考^ノ火^ノの^事也
といひてありくま^ハ同^一詞^也

一 面目^ト事^ヲを古書^ハい^ハめ^いば^くト書^スる^もあり^{保氏物類}

一 我子^ヲを真^ニ息^トい^ハせ^れト云^フ人^ノ系^ノの^形也

一 我事^ヲを由^希ト云^フ人^ノ系^ノの^形也

一 元^ノ無^ニ事^ヲとい^ハハ^ハ四^ノを^おど^す詞^ノ系^ノ能^ハる^もその^詞也
江^ノ字^ヲも^てもん^トい^ハと^云ふ^同一^ノ真^ニ無^ニ事^ヲと^云ふ^書ハ^化物
あり^し友^ノの^事と^我元^ノ無^ニ事^ヲも^同一^ノ事^也
元^ノ無^ニ事^ヲも^同一^ノ事^也
水^ノ禮^ヲも^同一^ノ事^也

一 見^ル系^トと云ハ人^ノの^形へ^系り^て對^面する^もの^事也又^ハ物^ヲを^人と^ス
見^ル系^トも^同一^ノ事^也入^ルト云^ハ古^ノの^詞也
見^ル系^トも^同一^ノ事^也
同^一ノ^事也

一 經營^トい^ハる^事を古書^ハい^ハめ^いとも^書り^{保氏物類}
保氏物類^ノ目^ノ考
中^ノ外^ノ古^キ書^ハあり

経管とハ事といふとあむるし
いふとむとハるの事
取とあむる

一 さんさあろふト云詞ハたぬとさやうもてハト云詞之

一 如法ト云ハ弱常ト云同別ニ移リしものもあきと云云

法中対して如法ト云云法ハ法ニ背きてし

一 意外ト云ハおのんえうりのありトよきて思の外ト云詞あり

今江ためて無礼のりをも意外ト云ハ非あり

一 吾心ト云ハ文字の通りことあきと吾心の不意と云ハ

をを思ふあく人の物を不意と云を云今時人の物をこ

をを云云心ト云ハ吾心の不意ト云を思ふこと詞之

一 計會ト云詞古書ニあり計會ト云てまうらひありやうトよ

む之何よりまてもあるのり彼ト是ト云今世にさやく一語ニ

あひころを云あり

一 おのれトモおのとも云ハ我身のある今江吾の詞よりぬト云

ハおのト云詞のあやまりえうぬれト云も同し

一 ありまひト云ハ振舞とも挙動ともあ人の身のありまひ

を云之然るは客人をよ食物を喰するを云まひといハ

あやまりしそれいしあしともある一まあやともいハ

又 ~~ま~~ のわけト斗ハ云管應の二字あり但管應を云

まハト云ハ此をすうト云ハ此此走の二字をせむるトよ

てまをうけむりて客のりてあしをすうなまひハ

云此古書ハ管應をぬるまひといふとぬあり

一 候むらと云も侍るト云も同し夫人の世氣を侍るのを云

管應の
二字
あるト
斗も
なり
候氏
物候
又い

又何々の後候すト云も其後儀を貴人の為に勤るを云
 一人は物を進するを教せるト云ハ此等々せるト云畧語之
 一 おぢやる又おぢやるおぢやるハ此種あるの移語あり
 一 湯ざりますすいすいしますと云ますハ甲の畧語之全書
 大見の家の家事[●]と云はあつ人のひ^正を^無を^有せん^有と
 あつる^有う^表を^失らん^失し^中い^中と^中ます^中云^中は^中ます^中も^中中^中
 今も薩^中ア^中あ^中の人^中ハ^中さ^中び^中り^中ア^中ス^中い^中と^中ア^中ス^中あ^中と^中云^中
 一 あり^中し^中ト^中云^中ハ^中ア^中と^中ある^中ア^中ト^中云^中る^中云^中ト^中云^中る^中の^中あ^中ら^中ん
 一 びん^中ア^中ト^中云^中ハ^中各^中便^中ト^中云^中て^中便^中宜^中ア^中ト^中云^中る^中を^中云^中
 一 己^中ぬ^中ハ^中我^中を^中己^中こ^中せ^中ハ^中我^中出^中る^中何^中も^中己^中の^中身^中を^中推^中て^中
 一 己^中ぬ^中ト^中云^中ト^中云^中ハ^中己^中こ^中せ^中の^中移^中語^中云^中

一 せん^中ぬ^中ると^中云^中ハ^中さ^中ら^中ら^中ト^中云^中同^中侍^中儀^中
 一 延^中弱^中とい^中ハ^中延^中弱^中の^中延^中弱^中の^中字^中本^中字^中ハ^中延^中弱^中云^中
 一 今^中イ^中サ^中シ^中ト^中モ^中ヤ^中ヒ^中ト^中ナ^中リ^中モ^中ウ^中カ^中シ^中ト^中云^中ハ^中ヨ^中シ^中ト^中云^中ハ^中モ^中ウ^中カ^中シ^中ト^中云^中
 一 の^中や^中く^中よ^中つ^中き^中を^中云^中延^中弱^中の^中官^中人^中又^中延^中弱^中の^中強^中弱^中ハ^中云^中と^中云^中
 一 ハ^中皆^中そ^中ノ^中威^中勢^中も^中あ^中く^中よ^中つ^中き^中を^中云^中
 一 志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中失^中礼^中の^中二^中字^中之^中無^中禮^中の^中二^中字^中之^中又^中病^中氣^中の^中二^中字^中を^中云^中
 一 志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中失^中例^中の^中二^中字^中之^中不^中例^中と^中云^中同^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中
 一 の^中畧^中語^中之^中三^中好^中等^中也^中此^中等^中は^中亦^中病^中氣^中を^中引^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中ハ^中志^中つ^中ら^中い^中ト^中云^中
 一 一^中員^中あ^中る^中人^中を^中云^中ハ^中庶^中者^中と^中云^中ハ^中近^中來^中の^中を^中云^中ハ^中初^中に^中云^中ハ^中初^中に^中云^中ハ^中初^中に^中云^中
 一 太平^中記^中卷^中十^中六^中を^中云^中ハ^中推^中系^中を^中云^中ハ^中庶^中者^中と^中云^中ハ^中庶^中者^中と^中云^中ハ^中庶^中者^中と^中云^中

公家ニテ
 此類の
 シワライ
 スルコト
 此類の
 此類の

一 香を嗅^{カク}るの香を聞くと云是常のあふりてかぐといふ
 郷^{キョウ}の詞はあふり源氏物語梅^{ウメ}の巻は
 こまひはくもあり川^{カハ}はひらこまめれ今^{イマ}の心も合せあ
 ひつふふあふり^{嗅合}をか^合あせあふり^最とけ^最あふり^多あり^有
 香をかくとも人のいひれいと知れぬ
 一 寺まの詞は三の糸あり一の糸衣をたまため清海をたまた
 むと云ハ賜ノ字又給の字二の糸ハ貴人の糸をいふはたまた
 ふたまため出たまふ入たまふあといふ御ノ字
 三の糸我思ふを思ひたまふら思ひきりあふり
 あり是ハ奉の字右三糸との糸皆人をさうやまひあふり
 時^{トキ}の詞^{ワカ}は^{カク}た^{カク}び^{カク}て^{カク}又^{カク}た^{カク}び^{カク}とも^{カク}その^{カク}の^{カク}皆^{カク}場^{カク}の^{カク}字^{カク}は^{カク}お^{カク}通^{カク}言^{カク}右^{カク}如^{カク}言^{カク}

一 古書は思ひふりて云あふり^{カク}オ^{カク}コ^{カク}云^{カク}あ^{カク}ふ^{カク}り^{カク}オ^{カク}コ^{カク}云^{カク}あ^{カク}ふ^{カク}り^{カク}
 お^{カク}コ^{カク}コ^{カク}の^{カク}あ^{カク}ふ^{カク}あ^{カク}といふ詞は是ハ人々對^{カク}さ^{カク}る^{カク}を^{カク}云^{カク}詞^{カク}あり
 き^{カク}コ^{カク}の^{カク}詞^{カク}を^{カク}除^{カク}ても^{カク}同^{カク}人^{カク}心^{カク}き^{カク}コ^{カク}の^{カク}詞^{カク}ハ^{カク}是^{カク}人^{カク}々^{カク}對^{カク}して^{カク}い^{カク}ふ^{カク}
 といふお^{カク}ま^{カク}あ^{カク}て^{カク}云^{カク}い^{カク}源^{カク}氏^{カク}物^{カク}語^{カク}を^{カク}外^{カク}古^{カク}書^{カク}に^{カク}是^{カク}物^{カク}語^{カク}あり
 多^{カク}く^{カク}あ^{カク}る^{カク}詞^{カク}あり

一 古書は喜樂と云詞あり喜樂とハ我々の心を我此を
 ほめ自滿して喜樂と云事と云
 一 古書は計會と云詞あり計ハもろろ之會ハあふり^{カク}徳^{カク}業^{カク}と
 云事と一層は^{カク}合^{カク}事^{カク}と^{カク}云^{カク}計^{カク}ハ^{カク}い^{カク}ひ^{カク}合^{カク}せ^{カク}し^{カク}る^{カク}如^{カク}く^{カク}あ^{カク}る^{カク}
 を計會ト云^{カク}和^{カク}漢^{カク}朗^{カク}詠^{カク}集^{カク}の^{カク}詞^{カク}ハ^{カク}今^{カク}日^{カク}不^{カク}知^{カク}誰^{カク}計^{カク}會^{カク}春^{カク}風^{カク}春^{カク}
 水一時来^{カク}
白居易カ詩ハ春風ト春ノ水トケタル水ト一時ニ来ルハ誰カ計ヒテ一時ニ
 會合スルヤウニシタルゾト云々ナリ

一 檄ヤケン燒ト云事今世云法檄燒能事ト云文字佛書有
出者ト云事) 中阿含經云預知檄嫌云又法華經方
便品因緣釋云感應亦檄嫌云

